

季刊午前 福岡県

同人誌ならではの試みを実践

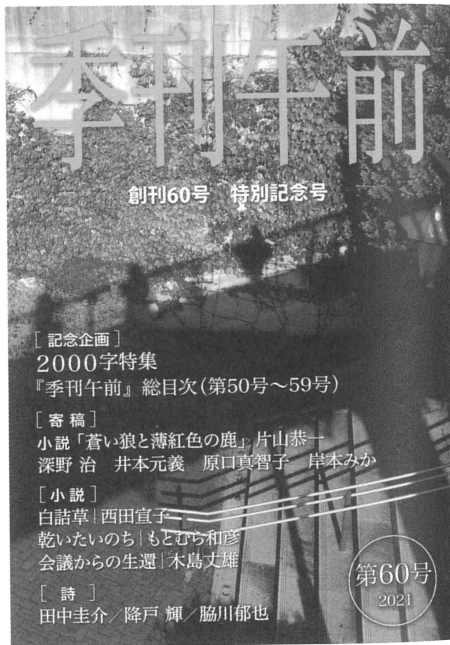
斬新な編集を心がける

戦後間もない一九四六年、福岡の地で商業文芸誌「午前」が眞鍋呉夫と北川晃二によって創刊された。その第二次、第三次の同人誌「午前」を経て、一九九一年に北川が再出發させた同人誌が「季刊午前」だ。

同人は現在（二〇二三年四月末）一七人で、この中から編集委員の中川由記子、廣橋英子、安河内律子、吉貝甚蔵、脇川郁也の五人が企画立案や寄せられた作品の掲載の可否など合議制をとっている。他に特別同人に岸本みか、原口真智子、潮田征一郎の三人がいる。

季刊を謳ってはいるが、掲載作品の質を保持するため発行の歩みは遅く、最新号は第61号（二〇二二年一月）だ。創刊以来、つねに斬新な編集を心がけており、同人誌でなければできない、工夫を凝らした企画特集を組んでいる。

企画作品を創作する中で「ある縛り」を作るとは、作家にとって新鮮であり、時にこれまで感じたことのない新たな世界を見せてくれるものだ。複数の同人が参加するこ



表紙写真は毎号プロのカメラマンに地元の風景を撮影してもらって掲載している



合評会後の懇親会

とから、「競作」という意識が芽生えることは当然で、刺激的・魅力的な取り組みである。まさしく同人誌ならではの取り組みといえるだろう。

最近の企画特集の内容を簡単に紹介したい。

●特別企画『季刊午前』四半世紀を超えて（第55号／二〇一七年）

第55号の発行が創刊から二五年を迎えたことから、「四半世紀を超えて」と銘打ち特集を組んだ。福岡在住の作家・片山恭一、創刊の父・北川晃二の旧友で詩人の椎窓猛からの寄稿を受けたほか、特別同人三人が執筆。創刊時の熱い思いや当時の世相を記したほか、フィクションの可能性について論じた。

●特別企画「ハノキヤ」ハノキヤ（第59号／二〇二二年）

二〇二〇年秋口に企画したのは、新型コロナウイルス感染症第三波の渦中に企画された。むろん月に一度の例会も中止とした。共に文学を論じ合う同人がこの新たな病によって分断された。それぞれが経験したこと、考えたこと、それを書きとめておくことが表現者として仕事であろう。この企画には同人の二人が参加、エッセイや詩に表した。

●創刊60号特別記念企画（第60号／二〇二二年）

節目の第60号では、故・北川晃二と古くから交流のある深野治さん、井本元義さんのほか、特別同人の皆さんに寄

稿いただいた。また同人全員が参加してジャンルを問わず原稿用紙5枚を発表する記念企画「2000字特集」を組んだ。これは発行の節目となる十号ごとに企画しているもので同人一人一人が参加した。

\*

「季刊午前」同人会では、創刊以来、毎月第三日曜日に欠かさず例会が開催され、発行号の同人合評会のほか、芥川賞受賞作品などをテキストとする勉強会などを実施している。同人加入希望者の見学も受け付けている。

（「季刊午前」同人会事務局・脇川郁也）

季刊午前

〒812-0015

福岡市博多区山王二丁目一〇・一四 脇川郁也方

☎092-452-0510



特別企画  
このときここにいて

湖田征一郎／山田敏彦／木島丈雄／田中圭介  
もとむらと和彦／脇川郁也／西田宣子／中川由記子  
廣橋英子／樺わたる／西川富美子／安河内律子

【小説】  
白狐／西田宣子  
捨てる神あれば拾う神あり／木島丈雄  
出合橋／樺わたる

【詩評論】  
北川晃二のモチーフによる輪舞曲／吉貝甚蔵

【詩】  
降戸輝／田中圭介  
橋本明／脇川郁也  
エッセイ  
もとむらと和彦／中川由記子  
（シヨウトウ）選／木島丈雄

第59号  
2021

ユダヤ難民を救った男  
樋口季一郎・伝  
木内是壽

ア経山で満州に逃れてきた2万人のユダヤ難民を、命を賭けて救った日本人将軍がいた。ハルビン特務機関長樋口季一郎少将。厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英傑の軌跡を通る歴史評伝。

アシア文化社

1540円（税込／送料共）  
御注文はアジア文化社まで

## 北陸の新興同人雑誌

一年半前に創刊し、この年の春で四号を迎える新興の同人誌です。初号の発行は小さな切っ掛けからでした。

富山の高志の国文学館内ロビーの一角に「プチマルシエ」という文芸関係の同人誌販売コーナーがありました。以前加入していた同人誌「渤海」が終刊し、自身の発表の場がなくなり、細々と書いているだけでした。誰にも読んでもらえないので、張り合いがないものでした。締切りがないと書けない自身の不甲斐なさもありましたので、内心では地元富山の同人誌に参加するつもりになっていました。誌歴があり、知り合いもいる少数メンバーの同人誌を一冊買い求めました。

同人誌の販売コーナー全般を見ているうちに、たまたま「文学フリマ」金沢という無料の小冊子が目に止まりました。有料だとしたら、持ち帰らなかつたでしょう。これが切っ掛けでした。

既に開催が終えた金沢での「文学フリマ」を案内した小冊子でした。アニメのフリマは聞いたことがあるのですが、「文学フリマ」では文芸等の同人誌の販売や交換を通じての、交流の様子が窺い知れました。



若者世代は文学離れが進んでいるものとばかり思い込んでいましたが、それは間違いでした。どの世代でも文学愛好家はいたのです。しかも、電子書籍等の媒体ではなくて、紙ベースで同人誌を発行していたのです。それを見て心強く思ったものです。

それでも、若者とは世代ギャップがあるし、それらの同人誌に参加は無理だろうという気持ちで小冊子を見ていました。その小冊子の印刷所の広告欄に目が止まりました。印刷物の仕上がり予定料金を見て、格安に印刷できる実状に驚きました。ネット上で印刷データを入稿するだけだからです。

小冊子の一部にはワープロソフトで同人誌を簡単に作成する方法が載っていました。パソコンの周辺機器使用症候群の傾向が自分に元々あったので、試してみたくありません。

た。

自作の稚拙な短編を一つ仕上げました。創刊号に載るなら、もっと気合を掛けて書けば良かったと、今は後悔しています。取り敢えず、ワープロソフトで見本誌を作成してみました。至極、簡単でした。以前なら、印刷所が使用していたような、業者専用ソフトの機能が、ワープロソフトに組み入れられていました。本来は複雑なはずの書式が、簡単に設定できるようになっていたのです。

実は同人誌「渤海」終刊時に、後で「繋」同人となる深井氏から新しく同人誌を立ち上げないかと勧められていたのです。発刊方法がよくわからなかったこともあり、何もしないでいました。要は自信がなかったのです。

自作品一つを掲載した見本誌ができました。自宅プリンターで汎用紙に印刷して、ホッチキス止めただけでした。それでも、見えなかったものが形となって可視化できるようなったのです。同人誌の仕上がり具体がイメージできるようになりました。旧同人のメンバーの深井、内角氏の二人に見本誌を見せて、参加を求めました。二人は二つ返事で快諾してくれました。そこから、同人誌発刊の覚悟ができたのです。すると、物ごとほとんどん拍子で進んでいきました。やってみると「繋」の創刊は思った以上にスムーズでした。

自分で同人誌を主宰するなど思ってもいませんでした。



当初は同人誌の発刊など避けていました。創作に専念したいと言うのは口実で、面倒なことはやりたくないというのが正直な気持ちだったのです。今は編集作業自体が楽しいです。

取り敢えず、三人での創刊となったのです。旧同人誌の繋がりが役立ちました。最小人数での創刊でしたが、合評会は必須の行事としかたなかったのです。目の前に読者がいるという感覚が必要だったからです。一つの作品に対して、読者の数ほど受け取り方は違うもので、そんな受け手の声を聞けるのは、合評会の醍醐味だからです。

コロナ禍の令和三年一月に創刊号の合評会が行われました。参加者はたったの四人でした。同人以外の参加が金沢の飯田氏でした。創刊号は見た目にも薄っぺらで、発刊ノウハウ不足が如実でした。それでも、飯田氏から掲載作品について、しっかりとした感想を聞くことができました。

飯田氏も旧「渤海」メンバーでした。一時、諸事情で音信が途絶えたこともありましたが、たまたま創刊に伴い連絡を入れました。関係が復活したことになります。そして、それを機会に二号に作品を寄稿してもらいました。おかげで、二号はページが整って、背表紙ができる厚さとなりました。以前からの人の繋がりが役立ちました。

さらに、飯田氏と同じ時期に「渤海」同人だった寺本氏に声掛けしてもらい、三号寄稿、四号加入となりました。



「繋」合評会 2023.5.14 富山県民会館にて

繋 第4号 / 目次

小説

観音参り 寺本親平

卯辰の一本松 飯田 芳

極楽図書館 池田良治

解脱 内角秀人

腹いっばいの馬 藤野 繁

幻楼 むらい はくどう

掌編

お庭にお花を 飯田 芳

小品

ただ、ただ…… 深井 了

合評会案内

あとがき

96 33 74 29 84 64 50 34 22 4

池田氏は寺本氏の推薦があり、寄稿を経て、正式加入となりました。三号から新加入の藤野氏は内角氏の作品を通じて参加されました。

有象無象の関係性の中で、想いや志を共にする人々の、輪が拡がり、繋がりました。現在の同人は七名で、幸いにも四号は全員オールキャストで作品を掲載できました。最低二人でも同人誌は発行可能です。次号以降で、誰かに不可抗力的な事態が発生したとしても、他の同人がカバーしてくれるでしょう。

持続可能な同人誌として、今後最低十年は発行を続けたいという願いがあります。深井氏が常々述べるように、世の中を驚かすような、傑作が生まれる場所として、この「繋」を存続していきたいものです。

(編集発行人 / 村井博道)



「繋」

Fax 0113001

富山県富山市馬瀬口三三〇 村井方

TEL 076-483-0402

村井博道



「楨」と房総の文学

房総文壇への新しい書き手の発掘をめざして千葉日報社が主催し、千葉県教育委員会・千葉県芸術文化団体協議会が後援して始められたのが「千葉文学賞」でしたが、入賞者たちの切磋琢磨する場がないことを危惧していた遠山あき先生は、千葉日報社創立十五周年記念の座談会の席で、「入賞者が文学を語り、互に励まし合って創作する場を持ちたい」と提案しました。

すると、これまでの千葉文学賞、児童文学賞入賞者二十七名が賛同して作られたのが文学同人「楨の会」です。昭和五十一年（一九七六）のことで、千葉県の県木が「楨」であることから、その名にちなんで命名しました。翌々年の昭和五十三年には創刊号『楨』1号を出版し、その後、同人誌『楨』を、年一回発行し続け、昨年末には『楨』45号を発刊しました。創刊以来、一度も欠かさずに発刊し続けたことが、この度、認められたものと思います。

最盛期には三十数名もいた同人も高齢化が進み、入院したり、鬼籍に入ったたりして、年々、会員数が減ってきました。また、創設者の遠山あき先生、二代目代表の三好洋さんと会長経験者が一年を置かずして続けにお亡くなりにな



中央1代目会長遠山あき先生、左2代目会長三好洋さん、右4代目の乾浩

り、「楨の会」も存亡の危機にみまわれました。そんなときに、最古参の松葉瀬昭さんが三代目の会長を引き受けてくださり、「千葉文学賞入賞」という枠を取り除いたり、入会金・会費を下げたりして「楨の会」を房総の文学愛好者たちの身近な存在にさせていただきました。それで徐々に立ち直ってきました。

三年前から、その後を受けて私（乾浩）が会長となり、新メンバーを募るために「楨新人賞」を設けたり、合評会の講評一覧をパソコン・メールで互いにやり取りするシステムを作ったりしました。幸い、「楨新人賞」の方は秋山裕幸さんが、また、合評会講評一覧表の作成には研修担当の藤田新吾さんが引き受けてくれて、合評会がより活発化し、充実してきました。さらに、一昨年の「第一回楨新人賞」を受賞して入会した宮川泉さんはNHK「銀の雫」文

学賞優秀賞を受賞した実力のある方で、また、「楨新人賞特別賞」を受賞して入会した夢酔藤山さんは房州日日新聞等地域紙の連載を持つなどプロ作家として活躍している人で、意欲と多才な能力を持つ同人が揃ってきて、日々、研鑽し、互に切磋琢磨している昨今です。

萩原紫香（幸子）さんは、昨年、われらの仲間（同人）に加わり、内に秘めていた才能が開花し、この度、その作品が認められて『文芸思潮』まほろば賞候補（優秀賞）となりました。



合評会での「楨」同人メンバー



また、この吉報に、「槇の会」創設者の亡き遠山あき先生も同人の活躍と会の発展を冥界で慶んでいると思います。房総を代表する文学同人「槇の会」の設立趣意は、「各人各様それぞれの世界や理念をお互いに尊重し合いながら自分という人間を表現するために自由に書きたいことを書



左 3代目会長松葉瀬昭さんと 4代目会長乾浩

く」ことと「いま住んでいる千葉の歴史や地理、伝承や遺跡を探り、この地で暮らす喜びを人と地域の絆(縁)として表現すること」さらに、「生きてきた証を小説や随筆に表現することによって、個々の生涯を見つめ直し、新たな自分を発見することを目指して創作すること」を伝統としてきました。

内房線五井駅サンプラザ七階にて、月に一度(第二日曜日)の午後一時から五時まで、それぞれが創作した作品を持ち寄り、厳しい中にも和氣藹々(あいあい)と合評会をやっていますので、小説や随筆、自分史を書いてみようかと思っている人は、是非とも、「槇の会」の門を叩いてください。

—叩けよ、さらば、開かれん!—です。

萩原紫香さんの今回の榮譽を同人皆で分かち合い、一人一人のものの考え方や見方を互いに尊重しながら、個々の創造性を伸ばす。そして、各人各様、目差す目標や夢に向かって飛躍することを願って活動しているのが「槇の会」です。

(「槇の会」代表/乾浩)

『槇』の会 事務局

F2900・0512

千葉県市原市鶴舞777

TEL 0436・880・3537

岸本(下尾) 静江

渴いているのは、心でした。

生田斗真  
門脇麦 磯村勇斗  
山崎七海 柚穂 / 宮藤官九郎 池田成志  
尾野真千子

原作：河林満(河林満) (角川文庫刊)  
監督：高橋正弥 脚本：及川章太郎 音楽：向井秀徳  
企画プロデュース：白石和彌  
配給：KADOKAWA ©「渴水」製作委員会

# 水 渴

主演 生田斗真 × 企画プロデュース 白石和彌 × 監督 高橋正弥 6.2fri  
先の見えない現代に問う、「心の解放」を描いた珠玉のヒューマンドラマ。

生田斗真

門脇麦 磯村勇斗

山崎七海 柚穂 / 宮藤官九郎 池田成志

尾野真千子

原作：河林満「渴水」(角川文庫刊)

監督：高橋正弥 脚本：及川章太郎 音楽：向井秀徳

企画プロデュース：白石和彌

配給：KADOKAWA

©「渴水」製作委員会

# 6/2 FRI

# ROADSHOW

# 原作 河林満

河林満「渴水」  
ついに映画化  
ロードショー上映  
6月2日より

黄色い潜水艦 兵庫県

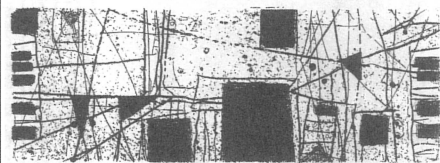
作家川崎彰彦が創刊

一九八四(昭和五九)年作家川崎彰彦が創刊。以後三九年、現在七五号。川崎が大阪文学学校(以下文校)の事務局やチューターをしていたクラスの周辺でメンバーを集めて創刊された『燃える河馬』(七〇年〜八二年)の後続誌として出発した。八九年、川崎が二度目の脳内出血で倒れ身体不自由になったので一三号から二〇号までを同人が補助しつつ発行。二一号から三〇号は松廣勇・平井義英。松廣氏が病没のため以後島田・三輪正道が編集を引き継いだ。

島田は、川崎の同人誌評を機に三号から参加した。川崎と文校で熱い季節を過ごした同人たちの輪に入るのには臆するものがあつたが、何人か顔見知りもいて縁と繋がりをお願いに飛び込んでいった。

『黄色い潜水艦』は以前とは違う趣で発行されていた。川崎は「河馬」の同人たちの自由気ままな才能を愛しながらも、編集者としては年一回の締め切りも守られないことに業を煮やしていたのだった。「潜水艦」は年二回発行を厳守するとし、出せないものは見切り発車という方針に変えたのである。新たに文校機関誌で活躍の愛知哲、大阪文学

黄色い潜水艦



『風の神の琴』  
『わが風土抄』とノア前史  
スイスのラッパ  
CINEMA  
『くるりのこと』  
高見虎さん追悼特集

訳 純平  
兼津謙太郎  
島岡ミナ

YELLOW SUBMARINE 50

学校賞を受賞した四宮秀二(のちに通教部のチューター)や谷口緑らの参加もあつた。

川崎の身辺の問題や健康状態さえ良ければ、雑誌はもつと発展してもおかしくないメンバーだった。川崎はその頃、学生アパートで筆一本の暮らしに不如意を抱えていた。一度脳出血で倒れたが酒は手離さない。すでに右手は使えなくなり左手で執筆。葉書でのやり取りにも時間を費やした。だるうし、十分なコミュニケーションは取れなかった。もともとシャイで、酒が入らなければ会話も苦手だったのか電話もなかった。自分のスタイルを確立していた人は別だが、私も含めて新同人たちは作品に対するアドバイスもな

く、手探り状態の中で書けなくなっていた。

意気盛んだった頃を知らないのが残念である。文校の教室で合評会があり、そこで批評を聞くのが唯一の勉強の場だった。四国から来ていた四宮や、新人の谷口の顔もあった。彼女のことを川崎は後に「ちゃんと育てられなかった」と悔いていた。合評後は飲み会へと突入。谷町の「すかんぼ」だったと思うが、以前のメンバーも顔を出してさながら同窓会の雰囲気だ。とにかく酒量がすごい。酒が入ると聞きたくない言葉も出てくる。慣れないうちは何を言われるか怖い気がした。

22.5 久しぶりに奈良大和郡山で集合



私は行き詰ったまま編集者だから仕方なく書き続けていた。まさか師匠に原稿を催促する日が来るとは。同人は皆私たちより先輩で年上だった。せいぜい締め切り前に電話をかけて、やりとりするくらい。合評では忌憚のない意見を言うようにしたが、出来ることは少なかった。三輪は校正を担当して何かと協力しあつた。名刺と雑誌を抱えて、一緒にあちこち配って歩いたものだ。





川崎彰彦のお墓の前で「夜がらす忌」お花見があるので毎春お参り

品を発表。著書も刊行されたが、長い闘病の時間が二〇一〇年に終わる。以後亡くなった二月ではなく四月に『夜がらす忌』（代表昨『夜がらすの記』に因）として、有志でお墓参り。生前からあったお花見を兼ねて郡山城に集まっている。同人だけでなく川崎の読者、縁のある方の集いだ。紆余曲折はありながらも、とにかく年に二回は発行してきた。三輪亡き後は画面編集者として天見三郎の力も大きい。私は合評会場のことなど雑用係であったが、発送、会計も担当者がいて助けられた。校正刷りが届いた時の嬉しさ、それを各自に分けて原稿とともに同人に発送する。一日でも早く届けたいと、逸る気持ちで昼休みに郵便局に走った。雑誌が届いた時の高揚感。指定した色が上手く行ったのか、ミスはないだろうか。そんな思いは色褪せず、七三号まで四三冊を出して、年一回の発行に切り替えた。頼りにしてきた長老の広岡一も亡くなり、創刊号からの同人は宮川美美子だけになった。

ここ数年は知友の入会や、私が大阪文学学校のチューターをさせて頂いているので卒業後に参加の人も出てきて、若い世代の活気が雑誌にも良い影響を与えてくれていると思う。新人、藤本あずさの転載も有難く、励みにさせて頂きたい。

（写真は写っていない同人もいるし、読者や仲間も写っています）  
（島田勢津子）

同人紹介（会員も数名）

- 天見三郎 第6回神戸ナビール文学賞受賞
- 木下衣代 第12回 神戸エルマール文学賞 佳作賞受賞
- 島田勢津子 第3回 神戸エルマール文学賞 佳作賞受賞
- 御館博光 批評誌『流砂』に執筆
- 宮川美美子『民主文学』に転載。著書『リレハンメル』の本千加子「みずぐき賞」を受賞。著書に『水輪の記憶』藤本あずさ「新潮新人賞」最終選考



「黄色い潜水艦」

発行人 宮川美美子 制作 天見三郎  
 編集人・連絡先 島田勢津子  
 setu26yama@gmail.com  
 T 665・0852 兵庫県宝塚市  
 売布4丁目3・30・3314



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」  
タイ・カンボジア国境の難民村。作戦した砲撃で無差別に死んだ多くの死体が散らしていた。

カンボジア難民の悲劇を描く  
 本体価格 1,700円  
 御注文はアジア文化社まで

三田誠広

「源氏物語」に託された宿望!

幼くして安倍晴明の弟子となり卓抜な能力を身に着けた香子。皇太子・皇孫と呼応して、神政の回復と世間整理を目指し、四人の娘を四代の天皇の中宮とし皇子を天皇に据えて権勢を極める藤原道長と繰り広げられる宿縁の物語。

『源氏物語』に託された宿望!

2024年 NHK大河ドラマ「光る君へ」関連本!




大阪文学学校から生まれる

「白鴉」は大阪文学学校で生まれた。大阪文学学校は一九五四年、小野十三郎、松岡昭宏らが発起人となって設立された。田辺聖子が一九六四年第五〇回芥川賞、玄月が二〇〇〇年第一二二回芥川賞、朝井まかてが二〇一四年第一五〇回直木賞を受賞するなど、現在に至るまで数々の詩人や小説家を誕生させてきた。

昼間と夜間部は詩・エッセイと小説のクラスに分かれ、さらにそれぞれ本科、専科、研究科と課程が進むようになっていく。週に一度、大阪メトロ谷町線谷町六丁目駅から徒歩数分、空堀商店街にほど近い新谷町第一ビルの三階の一室にて、生徒が提出した作品をだいたい二作品ずつ合評する。各クラスをまとめるチューターが合評を取り仕切り、各々の批評が出たあと総評を加えたり、作者に読むべき本を薦めたりする。この「組会」が終われば、昼は近所の喫茶店、夜は中華料理店や居酒屋でビールをかたむけつつ文学談義に興じたり、日頃の愚痴を吐露したりする。通信教育部もあり、年に四回作品を提出しチューター推薦で機関紙である『樹林』通教部作品集に生徒の作品が掲載さ

2023.1 [HAKUA] 33号

エリザベトを讀んで ● 崎田あお  
千崎 ● 大新健一郎  
大樹犬 ● 小島月うらら  
パタモン ● 藤本紘士  
うまれるじころ ● 藤本紘士  
マッスルメモリー ● 夏月麻希



白鴉文学の会

れ、スクーリングで合評される。また掲載されなかった作品はプレススクーリングに提出すれば他クラスの生徒の批評も受ける機会を得られる。コロナ禍により、大阪文学学校もオンラインでの合評会が可能となり、遠方からの参加者も多くなった。

生徒たちは各文学賞へ応募するほか、既存の同人誌に入ったり、仲間たちと同人や読書会を立ち上げたりして、文学活動続ける基盤を築いていく。

一九九七年、この文学学校の夜間専科秋吉クラスにて、チューターの秋吉好を中心とした少数精鋭により「白鴉文学の会」が結成された。設立時のメンバーに玄月がおり、

白鴉

2021.5 [HAKUA] 32号  
白鴉文学の会



『異境の落とし児』で神戸ナビール文学賞、『舞台役者の孤独』で小谷剛文学賞を受賞するなど、二〇〇〇年に芥川賞を受賞することになる『蔭の棲みか』を発表するまでのあいだ、目覚ましい活躍を見せていたという。

私、美月麻希が現在も一緒に活動する藤本紘士氏に誘っていただき「白鴉」に参加したのは二〇〇七年十一月発行の第二一号から。文学学校では通教部の専科を終わつたばかりで、合評にも慣れておらず、大阪環状線の鶴橋駅構内にあった喫茶店「シエルブルー」の個室に足を踏み入れた瞬間から怖かった。批評するのめされるのも。おかしな批評をすれば、自分という人間の底の浅さが透けて見えてしまふんじゃないかと思った。実際にそうなのだ。批評はそ

の人の読書体験や感性を炙り出してしまふ。「白鴉」で鍛えられて、少しはわかる人間になれたのか、私は大阪文学学校の通教部本科のチューターに推薦していただけた。そのきっかけとなった作品は、二〇一四年「白鴉」二十八号に掲載された「鳩の血」で、「文芸思潮」の第八回まほろば賞優秀作に選んでいただき、五十嵐勉賞を受賞。同時に藤本紘士氏も「蟹」で優秀作に選ばれ、まほろば賞特別賞を受賞した。さらに私は同じ作品でエルマール文学賞の佳作を受賞できた。「白鴉」に参加していなければ、現在の自分はいなかったと断言できる。

私が「白鴉」に参加した当初は年二回の発行だったが、いつの間にか一年に一度、それも難しくなつて、一年半に一度というような不定期刊行になってしまった。私が入ったときのメンバーも藤本氏以外全員退会した。例会会場にしていた鶴橋の「シエルブルー」が二〇一八年秋に閉店してしまい、阿波座の貸会議室で行うこととなったが、新型コロナウイルスの影響でオンライン合評になったり、様子を見ながら対面合評をしたり、と二〇二三年になるまで落ち着かなかつた。最新号は二〇二三年一月発行の三三号で、このたび掲載作の詩田あお「エリザベトを選んで」がこの「文芸思潮」でまほろば賞の優秀作に選ばれて、私も受賞したこの気持ち思い出して心新たにがんばりたいと思った。

今まで「代表」というものを置いていなかった「白鴉」

であるが、とりまとめ役がいたほうが便利ということもあって、私が代表を務めてはいる。だが「白鴉」の精神は何ら変わっていない。「白鴉」は書き手が寄り集まる場として機能することを目指している。来るものは拒まず、去るものは追わずが基本だ。加えて、せっかく新たに來てくれた人であっても、その作品批評にはいっさい手心というものは加えず辛辣ともいえる意見を遠慮会釈なく述べる。だが、その精神は変わってはいないつもりではあるものの、やはり私が参加した当初とはメンバーが藤本氏以外総入れ替えになっっている、些か変化したと思う。現在実働メンバー十二名で最近入ったメンバーは私のクラスだった人もいる。そのためか「育てたい」という気持ちも湧いてきているのだ。しかし、設立当初からのメンバーが「納得できるものしか掲載しない」という方針だけはこれから死守していきたい。

（「白鴉」代表／美月麻希）

白鴉文学の会  
〒661-0905

兵庫県尼崎市南清水一三・三

白鴉編集部 藤本絃士

Twitter: @haku1997

## 人間の脳が考へうる最高の物語

高速道路にて車を運転中、TOKYO FMの番組だったと思う。

芸能人が本を薦めるコーナーで「人間の脳が考へうる最高の物語」として、中国のSF小説、劉慈欣の「三体」（大森望光吉さくら、ワン・チャイ翻訳、立原透耶監修、早川書房）が紹介されていた。その話をしたら姉がハマってしまい、小難しいから、寝る前に読むとよく眠れる」と、たちまち長大なシリーズを読破してしまった。

日本で翻訳が出た当初（二〇一九年）から、「三体」の存在は知っていた。三田文学新人賞作家で四国大学教授の佐々木義登さんがツイッターで購入ツイートをしていたし、施川ユウキの読書家あるある漫画「バーナード嬢曰く」（REXコミック、一迅社）でも大絶賛されていた。全世界で二千九百万部近く売れ、オバマ前大統領も任期中に愛読。Amazonも千五十億円もの予算をかけてドラマを製作中。現実の余波だけでも冗談の如き話だ。

実際に一作目を読んでみた。「人間の脳が考へうる最高の物語」はさすがに大袈裟ではあるものの、日本のエンタメ作家達が百人がかりでも勝てなさそうな、次元の違いは感じたSF小説なので、「文芸思潮」読者からしたら、描写力には

### 同人名簿

#### ■会員

玄月  
碧井むく  
秋尾菜里  
大新健一郎  
藤本絃士  
蒔田あお  
丸黄うりほ  
美月麻希  
水無月うらら

#### ○準会員

宝田夜市  
真名波田キリ  
南水梨絵  
三宅羊一  
麦生 郁

新刊  
文豪の遺言  
木内是壽

作家の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。作家が残した最後の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。作家の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

坪内逍遙 尾崎士郎 岡田一葉 森鷗外 田山花袋 横溝 幸四郎  
国本良彦 夏目漱石 島崎藤村 芥川龍之介 永井荷風 菊池寛  
谷崎潤一郎 志賀直哉 有馬頼男 武者小路実篤 梶井 基次郎  
宮田重治 川端康成 小林多喜二 天佛次郎 岡本かの子  
吉川英治 志賀直哉 井上靖 三島由紀夫 松本清張 遠藤周作  
吉住信之介 岡田英太郎 寺山修司 向田邦子 中津健次

アジア文化社  
1728円 (税込) 送料別

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

1728円 (税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

難ありかも知れない。ただ、壮大なスケールで展開される荒唐無稽な事件を、リアリティーの範囲内にセメダインが如く接着させる、膨大なまでの科学知識には感服させられた。作者の劉慈欣は発電所のエンジニアだったらしく、SF小説の乱読により、その知識を身につけたような。

プラモデルの世界では、ウクライナとロシアの戦車や飛行機が売上でもライバル関係にあると、海洋堂の専務のユーチューブチャンネルで学んだ。創作の世界に置き換え、我々はこの先、中国と競えるのだろうか、恐怖すら感じる大作であった。

そんな折、慶應義塾大学で三田文学新人賞の授賞式があり、十数年振りに評論部門の受賞作が二作も出た。文学新人賞で評論部門が残っているのは「三田文学」くらいなため、この国で久々に文芸評論家が誕生したことになる。特に現役慶大生である石橋直樹さんの「(残存)の彼方へ」折口信夫の『あたるずむ』から——は超難解な内容で、読みながら何度ウィキペディアを引いたか知れない。民俗学という共通趣味があったため、ご本人に話しかけたところ、言葉の端々に教養が溢れ、会話の二割ぐらいいは理解が及ばなかった。

日本の若き「知」も、まだまだ捨てたものではない。